

丹羽文雄

人生有情

告白・わが半生の記

いんなあととりつぶ

読者のみなさまへ

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたの読後感を、ぜひお寄せください。また、あなたのお読みになりたい本をお知らせください。インナーブックスの企画の参考にさせていただきます。

なお、どの本にも、一字でも誤字や脱字がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ、幸いです。

株式会社 いんなあとりつぶ社
インナーブックス編集部

人生有情—告白・わが半生の記—

昭和四十八年十一月三十日第一刷発行
昭和五十年一月十六日第四刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 大坪直行

発行所 株式会社 いんなあとりつぶ社

東京都港区麻布台一丁目九番三号 郵便番号一〇六

電話(〇三)五八六一—八二二(代表)

郵便振替番号 東京一三五〇二四

印刷 太陽プリンティング株式会社

製本 田中製本印刷株式会社

© Fumio Niwa, 1973

乱・落丁本はおとりかえいたします。

0095—505011—0389

人生有情

目

次

人生有情

第一部

哀しき母の流転

「非情の作家」といわれて

悟りは悩みからはじまる

親鸞父子の義絶と私

自然にまかせて生きる世界

90 64 45 28 8

第二部

父と祖母の秘事

親鸞の眼

青麦（抄）——人間の愛欲と苦惱——

有情（抄）——父と子の葛藤——

205 192 152 120

解説

大河内昭爾

挿 装
絵 幀
都 杉
竹 村
伸 恒
正

人生有情

——告白・わが半生の記——

第一部

哀しき母の流転

ぼくは以前「情痴の作家」などというレッテルを貼られたことがあったけれど、なにも好んで男女の愛欲の場面だけを書いていたわけではなかった。ぼくの身にいちばん近くて、ぼくの身についた唯一のモデルが母親だったから、どうしてもその方面ばかりを書くということになってしまったのだ。

人間の欲望というものを追求するのに、お金とか名誉とか地位とかいうものにあこがれて、非常に謀略的に生きる男を追求するとか、ひとつの事業に打ち込んでいる場面で一つの人間性を追求するというよりも、やっぱり愛欲の場面で追求するほうが、ずっと鮮明に力強

く人間を捉えられるということを、ぼくは長い文学修業の上で発見したわけだ。愛欲の上には、その人の性格というものが非常に鮮明に出てくるので、つい、そういう舞台を使ったわけである。

けれども最初は、母親といつも向かいあっていたし、母親のことがいつでも頭にあってどうしてもそういう材料のものに走りやすかったといえよう。

もう亡くなった評論家の十返肇が、母を作家としてのぼくの恩人だ、と言っていたけれども、母親自身というのは、なにもそんなに頭がいいとか、特別にぼくに影響を与えた人物だったとかいうんではなくて、それこそ親鸞のいう「悪人」だった。つまり欲望に負けやすい人間、弱い女性だったのである。

いまだったら、女性も、ひとりで人になんにも言われなくても生活できるような時代だけれども、母親が若かった頃は、女がひとりで社会に放り出されてしまったら、どうして生きていったらいいのか、ちょっとわからない時代だった。

まして、当の女性が世間をよく知らず、たまたま人の目につくような女性だったら、すぐ

に再婚とか恋愛とか、そういう方面に関係してしまうのがふつうだった。生活力があれば、それをしっかり握って、自分を失わないで生きてもゆけるが、当時は生活力を持ちようがない時代だから、そういう誘いなどがあると、つい、男の意志によって右へ行ったり左へ行ったりというような、そういう生活に流れやすいものだった。

やっぱり当時は、女というものは男に付属しなければ生きられない時代だったと思う。だから、母親自身が好んで流転したわけではなくて、当時の社会からみても、やむなくそういう生き方にならざるを得なかったんだと思う。

多くの母親は、家つきの寺の娘だった。だから、養子に來た父と結婚したわけだが、その父が、じつは祖母と密通していた。

父を誘惑したのは未亡人だった祖母の方なんだが、祖母は二度結婚して、それぞれひとりずつ男の子を生み、離婚を重ねて三度めに崇禎寺そうげんじに嫁いできたような経歴の人だった。父が崇禎寺に養子にきたのは二十歳で、そのとき母はまだ十三歳だった。結婚式を挙げたのは数年後のことだが、そのとき祖母はまだ四十一歳の未亡人だった。

ぼくが崇顕寺の秘密を知ったのは、大学へ通うようになって、東京への往復のたびに母のいる岐阜をたずねていた頃だった。

母が昔のことを話してくれた。断片的な話し方だったが、そのときになってはじめて、ぼくは崇顕寺の愛欲地獄を知ったのだ。母親がその犠牲になっていたんだということを知った。「お内仏の間にはいつていくと、お父さんがおばあさんのお腹をもんでいた。お腹が痛いといわれるので」

というふうに、母親は庫裡の秘密を語ってくれた。お内仏の間は昼間でもうす暗かったから、もつれている姿が、もんでいるようにも見えたんだろう。そのとき母はまだ結婚していなかった。それからずっと、母が結婚してからも、祖母と父の関係はつづいていた。

夫と自分の母の不義が、若い世間知らずの彼女にもだんだんわかってくれば、母が家出するのは当然のことだ。それに祖母は娘の婿を一人占めしたために、母が家出するようにしむけてもいた。母の流転はそれからしまった。

このことは、ぼくの小説になんべんも書いたり、しゃべったりしたことだけれど、いきさつはそういうことだった。ぼくが小説家になったのも、そしてその小説の出発点も、みんなそこからはじまったといえる。

そういうわけで、母は家出をしてしまったが、それは、最初はそういう家の中が不愉快なことの憂さ晴らしからはじまっている。

いまだったら温泉へ行ったり、都会へ出たり、いろいろと気分をまぎらわす機会も場所もあるだろうけれど、昔はそういうものがない。田舎の人が気をまぎらすのは、ときたま地方へ回ってくる歌舞伎の芝居を見に行くぐらいなもので、非常に狭い生活だった。

母はその芝居を見ているうちに、歌舞伎役者と仲よくなってしまった。母は役者相手にうつつをぬかすような年齢ではなかったから、やけくそだったのだろうと思うが、とにかく九歳の姉と四歳のぼくを残して家出してしまった。そのとき母は二十七歳だった。

ぼくは長いこと、母親が家出したのは、ぼくの八つのときだったと思っていた。ところが

じつは、ぼくの四つのときだった。長いこと、八つだ八つだと思い込んでいたから、ぼくの文学履歴をみると、「八つのとき生母家出」と書いてある。だからそれを全部変えなければならなくなってきた。

というのは、ぼくの姉がアメリカから何年かぶりで帰ってきたとき、その話をしたら、それはぼくの四つのときだという。姉はぼくより五つ上だから、そのときの記憶によれば、姉は当時、小学校の二年生だったという。これは姉のほうがはっきりとよく知っている。

それでぼくは「ああそうか、じゃあ四つのときだったのか」と思ってた……。ところが四つのときでも、はっきりと記憶に残っているものがある。

ぼくはときどき自分の孫が、いま孫のいちばん上が十一歳で、その次が九つ、その次が八つ、いちばん下が三つだけれど、この孫たちの四つぐらいのときをひよっと眺めて、自分の四つのときは母親とこういうことがあったなあと思い起こすことがある。そうすると、孫の四歳というものが、ただ可愛いだけの四歳というのではなくて、こういう四歳にでも、人生の悲劇というものが食い込む余地があるんだなあと思った。

そういうふうに考えると、四歳という子どもを漠然とただ可愛いというだけでは眺められない気持ちになる。これはぼくだけひとりの感傷かもしれないけれど――。

というのは、母親がぼくを連れて歌舞伎役者と、ある町で会っていたことを知っているのだ。ぼくを連れていかないと家を出られないからだ。ぼくが、ふと夜中に目をさましたら、母親がぼくのぜんぜん知らない男の人と枕元の火鉢で、たがいに手をあぶりながらしみじみと話していた。もちろんその頃は部屋に暖房なんかありませんし、火鉢だけが暖をとる唯一のものだった。

「知らん人やなあ」と思って、ぼくは寢床からぼっこり起きた。そうしたら母親が、ぼくにまたすぐに寝るようにという。

ぼくはなかなか寝ないんだ。で、ぼくに五十銭銀貨をくれた。三枚。当時の五十銭というのはとても大きかった。もう手にいっばいになるぐらいのお金をもらって、よろこんで眠った記憶がある。

それがぼくの八つのときだと思っていたが、四つのときのことだった。べつにそのときの